

平成 23 年度第 2 回（通算第 38 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

「原発事故と“重層する環境ガバナンス”の再建」

教員世話人 安溪遊地 井竿富雄 進藤優子

院生世話人 申明賢 竹部徳真 武永佳奈 張亮

日時 平成 23 年 5 月 25 日（水曜日）16 時 10 分より

場所 国際文化学部棟 C-12 教室

主催 大学院国際文化学研究科

発表者 安溪遊地（あんけい ゆうじ） 国際文化学研究科教授

タイトル 「原発事故と“重層する環境ガバナンス”の再建 失敗の歴史に学ぶ」

概要

発表者は、1974 年から「人と自然の関係」の総合的研究を志して、沖縄やアフリカのフィールドワークを重ねてきました。また、チェルノブイリ原発事故の直後の 1986 年から 88 年にかけてパリに暮らしていたことから、環境問題という名前の人権問題に強い関心を寄せてきました。

2006 年からこの春までの 5 年間は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究として、日本列島の環境史に取り組んできました。ここでは 130 人の研究者とともに、日本列島の自然とのつきあいの中で「賢明な利用」と「賢明でない利用」とは何か、を考える機会を得ました。その議論の中で、環境への働きかけにあたって、統治と自治を併せた概念である「協治」（環境ガバナンス）が大切であることに気付きました。そして、家庭・集落・市町村・県・国・政府間・グローバルといったさまざまなレベルでの環境ガバナンスが重層しながら相互に役割を分担していることが大切だということを、さまざまな歴史上の失敗事例での研究から結論しました。

この見方で、現在進行形の東京電力の原発事故や、山口県上関での中国電力の新規立地計画をとらえなおして一緒に考えてみたいと思います。

【参考文献】

・安溪遊地、2011「足もとからの解決 失敗の歴史を環境ガバナンスで読み解く」湯本貴和編『日本列島の 3 万 5 0 0 0 年 第 1 巻 環境史とは何か』、文一総合出版。

・安溪遊地・当山昌直編、2011『奄美沖縄環境史資料集成』、南方新社。

・ダイヤモンド・J、2005『文明崩壊 滅亡と存続の命運を分けるもの（上）（下）』、草思社。

・日本生態学会上関要望書アフターケア委員会、2010『奇跡の海 瀬戸内海・上関の生物多様性』、南方新社。

【キーワード】 口頭伝承 環境史 失敗学と希望学 天災と人災 生物多様性 環境ガバナンス

終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（やまぐち国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちら皆様積極的なご参加をお願いいたします。